

2018. 5. 2 (水)

自由と関西学院－稲垣足穂の小説から見る

荻野昌弘

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10 章 30-37 節)

稲垣足穂『一千一秒物語』とクレッシェント

私は関西学院の出身ではありませんが、教員としてかれこれ 30 年近く関西学院大学に勤めています。何で他の大学に移ることもなく、ずっとこの大学にいるのかを、最近いろいろ考えますが、実はある意味、関西学院と精神的な出会いを高校生のときにしています。

それはどういうことかという、かなりマイナーな作家ですが、関西学院出身の稲垣足穂という作家がいます。この稲垣足穂という

作家のことを、私は高校生のときに大好きで、そのときに読んでいた本を今日持ってきましたけれども、この作家の作品はほとんど読みました。

風変りな小説家で、23 歳のときに世に出した処女作が『一千一秒物語』です。『一千一秒物語』は、日本におけるいわゆる「ショートショート」の先駆けで、月に関する小話が続くのですが、途中で月は三角だという話になるのです。普通、月は丸いと思われているが、実は月は三角だと。

最後のところで、「A MOONSHINE」と小見出しがついた小話が、「A が竹竿の先に

針金の環を取りつけた 何をするのかとたづねると三日月を取るんだつて ぼくは笑つてみたがきみ おどろくぢやないかその竿の先に三日月がひっかかつてきたものだ。最後に三日月は捕獲されてしまいます。

この小説は、漫然と読んでみると、月は実は三角だという話をめぐるエピソードの積み重ねなのですが、昨日も読み返してみても、小説のなかの三日月というのは実は関学の三日月＝クレセントなのではないかと改めて思ったわけです。

稲垣足穂『古典物語』と原田の森の関学

へんてこりんな小説をいろいろ書いている人ですが、関西学院に関しての自伝的な作品もあって、ちょうど第一次世界大戦が始まった1914年に、足穂は関西学院に入学しますが、そのときのことを書いた『古典物語』という小説があります。

たまたま高校生のときに、1914年で時代は異なりますが、稲垣足穂の高校生生活を読んで、私は、すごくうらやましいと思うと同時に、少しこれにあやからなければならぬとも思いました。

その当時、院長だったのが、3代目の院長のニュートン院長という方です。小説のなかに、このニュートン院長が南北戦争に出て戦っているという話もあって、実際、『関学事典』で調べてみると、陸軍の士官学校を出ていて、南北戦争にも出ているような人です。

足穂が過ごした関西学院の時代の話も面白くて、今のわれわれからすると非常に優秀な生徒たちであったことがよく分かります。何よりも自由に、自分たちの好きなことをやっていて、これが素晴らしいのです。

この主人公は稲垣足穂がモデルになっていると思いますが、文学、あるいは物理学、美術など、さまざまなものに興味を持っていて、例えば休憩時間に物理の先生に物理に関して質問して、先生と生徒の間で議論するということが普通に行われています。ほとんどの先生は日本人ではないですから、英語もかなり話されていて、この稲垣足穂もベルグソンというフランスの哲学者がいるのですが、ベルグソンの翻訳の分からない箇所を知りたいと思って、洋書をわざわざ取り寄せて読むということもしています。

要するに、非常に自由な雰囲気のある学院で、この当時はまだ、関西学院は上ヶ原ではなくて原田の森という所にありましたが、今でも当時のチャペルは神戸文学館という形でそのまま修復されて残っていますので、一度機会があったら、ぜひ訪れてみて下さい。

また、文学館の前に、横尾忠則美術館という、横尾忠則という芸術家の美術館がありますが、そこの4階からかつてのチャペルを眺めると関学の旧チャペルは非常に美しく見えます。一度、卒業するまでに、ぜひ行っていただきたいなと思います。

ルカによる福音書 10 章

「KG スピリット」ということで、私が KG というので、最初に出会ったのは、この稲垣足穂と彼が描いた1910年代の関西学院ですが、まさに全く偶然のように、それから何十年も経って、関西学院大学に着任することができて、改めて非常に縁があるなと、今思っています。

KG スピリットとは何なのかと、この機会にいろいろ考えてみました。先ほど紹介の中

であったように、私が学部長をしていたときに、1970年に卒業した学生がちょうど65歳になったときの同窓会に出席しました。

私が非常に驚いたのは、65歳であるにもかかわらず、OB・OGたちが一堂に会すると、学生のとときの姿に戻るのです。どういふことかということ、私のゼミ生と同じような感じで、みんな同じようなコミュニケーションをしているのです。つまり学生のとときの姿をそのまま残しながら、65歳になっているのです。それをおそらくKGスピリットと呼ぶこともできるような気もしますが、関学出身者が集まると学生のようなコミュニケーションをすぐ取れるようになるのは、一体どういふことなのか。

たまたま、こういう「KGスピリットとは」という話をするには全く言わずに、ある関学出身ではない社会学者の友人と関学の話になったときに、関学にはKGスピリットがあると彼が言ったわけです。彼は四国のある大学に勤めていますが、その同僚に関学出身の先生がいて、その彼は素晴らしいのだ、ということを楽しみに話すわけです。

どういふことかということ、ある意味単純といえば単純なのですが、困っている人がいると、すぐに助けようとするのだ、そして、それはすごい、というのです。

先ほど打樋先生に読んでいただいた聖書の箇所は、困っている人がいたら助けるという箇所です。それはそうだろう、道に倒れた人がいたら、どうしたんだと言って助けるのは当たり前ではないか、と思うかもしれませんが、しかしどれくらいの人が本当にそれをできるかということ、確かに困ってはいるけれども、関わると面倒くさいと思って通りすぎてしま

うこともあり得るでしょう。

この箇所は非常に重要な箇所なので、聖書の解釈としてもいろいろ議論できるところですが、時間がないので、それは専門家の打樋先生にお任せするとして、私自身が感じているところだけを言いますと、最後のところで、「行って、あなたも同じようにしなさい」と。つまりKGスピリットを持っていると言われている関学出身の先生というのは、すぐに行って同じようにしているということだと思います。そういうことを言うのは簡単ですが、実際に行って助ける、つまりすぐに行動に起こせるというのは、実は非常に難しい。しかしそれができるといふのが、KGスピリットの核にあるのではないかと、私は最近思っています。

自由と奉仕

その話と、先ほどの自由な学院というのがどのように関わるかということですが、そしてそれが私の考える個人的なKGスピリットだと思うのですが、実は、すぐに行って助ける、あるいは何か困っている人がいたら行動を起こす。その前提として、自由に自分の好きなことをやっているということが、実は対になっているのではないかと。自分の好きなことをいろいろやるということと、人をばつと助ける、そのために体がすぐに動いてしまうというのは、実は対になっている。

逆にいえば、例えば実際にボランティア活動など、いろいろな活動を関学あるいは社会学部でやっていますが、それをやるかやらないかは別に、好きなことをまずやっているということが、何か困っている人がいるときにすぐ体が動くということの実は前提になる

のではないかということが、最近分かってきました。

『古典物語』という自伝的な小説の最後のところに、自分は要するにいろいろ好きなことをやってきたと。それはあくまでも自分が好きでやってきたと。あるいは自由にやっていたと思っていただけでも、実は違っていたということが書かれています。

自由にできていたのは、実は学院がそういうふうにさせてくれたからだと。これだけ自分が好きなことをやって、要するに、そんなにテストの点数を上げたり、あるいはどこかいい大学に入ったり、そんなこととは全然関係なく、本当に好きなことだけをやらせて、それを認めてくれていた。それは実は自分が好きなようにやっているように見えただけでも、学院のおかげだった、ということが書かれています。

最後のところが少し皮肉っぽいのですが、「然（しか）し次なる時代の聲音（あしおと）がもう其処（そこ）に響いていた。何故（なぜ）なら、多理らのあとに続く学年からは、総（すべ）て只（ただ）上級学校入学率増進にのみ向けられるものに刷新されてしまったからだ」と。

多理というのは主人公の名前なのですが、つまり多理たちが学生生活を過ごした学院の自由な精神は、進学率を上げるといった目的に次第に取って代わられてしまっている。それを危惧するということを最後に書いている

のです。

そうやってみると、最近、関学も英語で TOEIC の点数を上げろ、あるいは GPA の点数を上げろといったことばかりを、言いだしてきています。そういう意味で、1910 年代にあった自由は、私が着任した頃にはかなり残っていましたが、それがだんだん失われるのではないかという、ある種の危機感も持っているのです。

ぜひ、KG スピリットというのは、大学生活の中で自分が一番興味を持っていることを探して、それをやるのが実は次につながるということを念頭に置いて、いろいろさまざまなことに挑戦していただきたいと思います。

チャペルというと、何か少しお説教くさいような、そして、私の話もちょっとお説教くさくなったので反省していますが、このチャペルではそうではなくて、いろいろな音楽など、さまざまな学生の活動にもふれることができます。つまり学生が自由に好きなことをやっている姿に、ここで接することができます。ですから、まさに 1910 年代にあった関西学院の自由さというものが、このチャペルの中にこそあると考えていますので、そういう意味で、ぜひこれからもチャペルに参加していただきたいと思います。それではこれで話を終わりにします。

(社会学部教授)